

第8章

帰国したペルー人生徒の社会 および学校への適応

ラウラ・ヤギ・アカミネ

帰国したペルー人生徒の社会および学校への適応

ペルー国立サンマルコス大学大学院および教育機関協同組合立、ラ・ウニオン校
ラウラ・ヤギ・アカミネ

この論文では、学齢期の一時期を日本の学校で1～6年間勉強した日系ペルー人で、帰国後ペルーの中学校に編入した生徒の適応と不適応の結果を述べている。彼らは皆ペルーに帰国後、1～6年が経過している。

学校教育における不適応としては、目的意識の低下、教師への反感、規律に対する反抗、学習意欲の低さなどが考えられ、社会への不適応としては、攻撃性、過度の内向性、規範へのいらだち、不信などが考えられる。

問題提起

ここでは、日系ペルー人の若者が一定期間日本で教育を受け、その後ペルーに帰国した後の学校への適応、社会への適応についての研究を試みている。帰国後ペルーで学校生活を始めた若者達について考えるとき、次の様な多くの疑問点が持ち上がってくる。

日本での教育を受けた経験を持つ若者が、帰国後ペルー社会へどう再適応していくのか、どのようにスペイン語と日本語の文法構造を再編成するのか、日本社会の規範は彼らにどれほど重要で影響力を持っているのか、といったことである。このペルー社会への新たな再適応状況において、子どもは、家族とともに、個人レベルと同様社会レベルでも挑戦していかなければならない。

パチェコ (Pacheco) とその共同研究者達は (1984)、生活様式、人間関係、家族関係が変わることは、移民者達に、物理的・社会的環境の認識だけでなくアンデンティティーの認識をも混乱させることを指摘している。

アメリカに移住したヒスパニック系の子ども達について、トゥルエバ (Trueba) は次のようにいっている。「適応は伝達能力の完全な再編成と、記憶された言語 (子ども達の母国語) の排除を伴う優位な言語の取得を必要とする。もし、これに失敗した場合は高いレベルでの不安と緊張がひきおこされる可能性がある。」 (Trueba 1983, p.14)

COOPSEの教育機関ラ・ウニオン (La Unión) の民間通信機関プログラム (PEAD) (1994) のモノグラフによると、通信教育に登録されているペルー人学生は合計840人で、年齢は6歳から23歳である。初等教育の1年生は登録者数の一番多い学年で103人である。その他の学年は62人から87人と様々な数になっている。

PEADは1994年に設立され、274人の登録者ととも開始されたが、登録者数は年を追うごとに増加し、現在は840人になっている。

この840という数字は、いずれペルーへの帰国を考えている者の人数で、この数は大変重要な問題を含んでいるといえよう。

1. ペルーと移民

ここ40年間、ペルーは歴史上経験したことのない新しい現象のただなかにある。それは異国への移民の急激な増加である。最大の移民先はアメリカだが、ベネズエラ、アルゼンチン、チリのようなラテンアメリカ諸国、スペインやイタリアのようなヨーロッパの国々、そして最近では日本のように文化の異なる国への移民も増加している。そして移民の急激な増加は、“進歩の神話”、またペルーにはなかったとされる“近代性”を生む結果となった。

特に70年代においては、第二次世界大戦後の急速な経済発展で、移民の大部分がアメリカに向かい、アルゼンチンやベネズエラへも一部の移民が渡っていった。

この70年代の10年間は近代化と経済発展が信奉された時期ではあった。だが、まだ海外への渡航は上流階級とリベラルな専門職業人だけの特権でしかなかったことも事実である。

70年代はまた、ペルーの国家主義による軍事政権の時代だった。そしてそれは、外国にいるペルー人を帰国をさせる動機になるどころか、結果的には移民の要因になっていった。

また、農業、工業、エネルギーの改革を通して社会階層の状態は変わっていき、この10年間を特徴づけていた開発主義や近代化の概念は、マルクス主義のイデオロギーによって弱まった。資産を形成していた多くの外国人移民は、新たに自らの母国へ、その他は、エクアドル、ベネズエラ、メキシコなどのラテンアメリカ諸国やアメリカといった別の国に移住していった。政治的に国家体制と対立する人々もまた、他国へと移住していった。

70年後半になると、中央アンデス山岳地域の農民や牧畜者達も含む、中間層の移民が始まった。

80年代は、ペルーにとって政治的にも経済的にも非常に大きな意味をもつ時代であった。というのは、80年代ペルーは民主主義の復興と、ひき続いた経済破綻、政治的暴力、麻薬取引などが同時に起き、移住者の帰国の奨励をしないばかりか、逆に移民をすすめていた時と同じ状況になっていたからである。平行して、日本のような新しい移民先の選択肢もあらわれ、外国への移民が強化された10年でもあった。

移民の現象は上流階級ばかりではなく、自ら貧困化していくことを感じ始めた中間層の人々にも広がっていった。

1980年当時のペルー人移住人口は50万だったが、その10年後には、“日本、スペイン、イタリア、カナダ、ドイツ、スイス、ベルギー、オランダ、イギリス、スウェーデン、デンマーク”など新しく移住先が増えた結果、二倍以上の110万人近くに膨れ上がっていた。(Altamirano, 1993: p.12) だがこの移民先の拡大は、アメリカ、ベネズエラ、チリなどが、もはや移民先の関心の対象ではなくなったことを意味するものではない事を記しておく。

前述したように、80年代は新しい移民先が生まれた時期であるが、その一つとして日本の場合をとりあげてみる。

日本は世界でもっとも経済発展を遂げた4カ国の一つとしてとりあげられている。しかし、高水準に達した技術を持つこの国では、経済的に活躍している人々の間で、社会的な精神構造が変化した。主に若者であるが、彼らはできるだけ肉体労働を避け、知的労働を好み、外国の大学院で学ぶようになった。そうしてこの現象が、日本での労働力の不足を招き、外国人に仕事の間を開放をする道へとつながっていくことになった。

その一方同じ時期に、ラテンアメリカ諸国、特に経済、政治、社会が危機的な状況下にあったペルーでは、センドロ・ルミノソやMRTAのテロがピークに達していた。さらにインフレが家計に深刻な影響を与え、政治社会的にも経済的にも不安定な環境になっていた。

1990年から、日本における日系人口は著しく増加した。ところで日系人という定義は一般に、“日本を起源とする人をいうが、より明確に説明すると、それは外国に移住した日本人とその子孫に与えられる一般的な名称である”とされている。(Tajima 1995: p.403)

だがこの概念は、日系ペルー人のコミュニティでは少々異なるとらえられている。日系ペルー人の間では、日本以外の国で生まれ日本人の祖先を持つ人々という認識がされている。

日本へ移住してきた人々は、ある一定の社会文化的コストを払って日本に同化していく。しかし、日本文化に同化する、ということは、具体的にどういう意味なのだろうか？ アルタミラーノ (Altamirano) はそれを次のように明示している。彼によれば同化するプロセスとは、自分の行動、世界観、新しいアイデンティティーを獲得できるかできないかの能力において、移住者自身が自己イメージを鍛えることである。そして新しく獲得されたアイデンティティーは、両文化を同等に、または異なる度合いで担うことができるだろう。あるいはペルー文化の“日本化”を導くことになるかもしれない。

2. 適応とは何か

(1) 適応と不適応

適応とは、各人にとってより個人的で仲間内の必要性の満足を獲得すると同時に、住んでいる環境の要求に順応し、満足する必然性を持ち、ある種の固有のバランスを得ることを意味すると考えられる。

そしてこのバランスは、次の2つのことを前提としている。それは、子どもに提起される要求が彼らの反応能力を超えないこと、そして環境が個人の成長と発展を助け、適応を促す動機に必要な貢献を果たすことである。“人間であるということは、人生の計画を持つということで、すべての計画はその実現のために、今いる世界から、物理的、社会的、職業的、宗教的、文化的世界に連続する適応を必要とする”。(Jimenez 1979: p. 20)

また成人した若い移民達の場合、母国に戻ることはそれまで築き上げた仲間や友人を、そして、育んだ友情をあとに残していくことを意味する。それゆえ、適応にかなり柔軟性が見られる未成年者のケースとは対照的に、成人しているケースでは社会への再適応に大きな困難を示すことが、パチェコと協力者達によって指摘されている。成人した若い移民の間には帰国後、自分自身の国を否定的に感じ評価してしまう傾向もみられる。物理的な面では景色や気候、住宅に違和感を感じたり、社会的な面では、母国の国民性を、攻撃的、信頼に値しないなどと感じ、母国を認めようとしないのである。

ヒメネス (Jimenez) (1979) によれば、学校に適応できない学生は、その行動に問題があり、嘘をついたり盗みを犯し、過激な行動、嫉の悪さ、規律を守らない、反抗的、素直に服従しないなど様々な様相を見せるという。疲れはときどき不可解な行動までおよび、自信のなさ、感情の不安定さ、自己に確信をもてない危うい感情、いらだちなどを引き起こす。勉強に興味をもてないことが原因して彼らを憂さ晴らしへと走らせる。また 不適応性は、より客観的な様子としてもあらわれる。不満足な気持ちで学校に服従することで、子供たちは学校の義務を怠るようになり、根気がなく、怠惰になり、学力不足で宿題をこなさなくなるなど、それは様々な形で現出するとヒメネスは明示している。

不適応は、個人と環境の間に成立した不適當な関係と考えられる。個人的にも社会的にも学校においても、若者や子供たちが非行に走ることをないようなシステムをつくる一方で、いち早く不適応の兆候を見つけ、それを防ぐ方法を見つける必要がある。

(2) 関連する先行研究

移住やそれに伴う家族への影響の問題については、世界中で研究やセミナーが行われている。1976年4

月26日から30日にはスイスのジュネーブで国際セミナーが開催された。このセミナーは、受け入れ国における移民の同化の困難や出身国への再統合の問題を解明する目的で開かれた。

問題を明らかにする見方は様々ある。しかしここでは、移民であるがために直面せざるを得ない異文化や異なる言語への適応にともなう葛藤や、これらが原因になり生じる精神的困難を子どもたちは乗り越えなくてはならないといった矛盾のなかで、多大な努力をしながら移住者たちが同化しようとする様をとりあげた (UNESCO, 1978 a, p.12)。多くの場合、偏見が彼らの社会的、言語的適応を難しくしている。そして適応できるかというかは、その社会での当核グループの社会的地位に左右される。

トクマー (Toukoma) (UNESCO, 1978 b; p. 8) は、新しい国でもっとも早く新しい言葉をマスターするのは7歳の時に言葉を習い始めた子どもで、続いて9歳または10歳の子どもであると述べている。つまり、10歳前後に移住した子ども達は、言葉を定着させる時間を持ち、母語能力を発展させることができるから、外国語を学ぶには一番適した状態であると言うのである。違う言葉を学ぶには6歳から8歳の間がもっとも良い時期であるとされている。

トゥルエバ (1983) は、カルフォルニアのコンダド (Condado) の小学校でメキシコ人の子ども達とメキシコ系アメリカ人の子ども達の研究を行った。その調査では、一世のメキシコ系アメリカ人の子ども達には不安、逃避、挫折と悲しみの三つの特徴が見いだされ、一方、二世のメキシコ系アメリカ人の子ども達には攻撃性、不安、逃避そして集中力の欠如が見いだされている。

このテーマに関するペルーでの研究調査は存在していない。そのわけは、おそらく当核現象がごく最近起っているためだ。89年からペルーが直面している社会経済面での困難 (インフレーションの進行、失業、テロ) により、多くのペルー人家族 (日系人家族も非日系人家族も) が、家族で日本に移住する必要に迫られてきた。実際、日本の法務省によると、“日本における日系ペルー人の数は、1988年には1,000人にも達していない。しかし、1990年には10,000人に増え、1992年の終わりには30,000人を越えた。1994年の初めには40,000人以上のペルー人が数えられ、日系ラテンアメリカ人 (主にブラジル人) のすべてを含めると、合計200,000人に至った”と報告している。(Fukumoto, 1997; p.355) 現在では、日本全国で41,317人のペルー人が外国人として登録されていて、最も集中している県は、順に神奈川県 (6,522人)、愛知県 (4,218人)、静岡県 (3,800人) となっている。

パチェコとその協力者達 (1994) は、新しい社会環境における移住者の人間関係と母国社会における結びつきを調べるために、22人の若者を調査した。プエルトリコからアメリカに移住した若者の場合、プエルトリコ的環境や家族およびプエルトリコの慣習に強く結びついていた。また、彼らにとっては、家族は、移住者である彼らの人生のバランスを保つシンボルである。だがその一方で、アメリカに戻る移住者はアングロサクソンへ強く同一化していることがわかる。

ディアス・ゲレーロ (Díaz Guerrero) とその協力者達 (1994) は、2つの異なる文化における価値感を調査した。彼らはその調査のために“敬意 (respeto)”という言葉を用い、メキシコとアメリカが地理的に相対する国境地帯の二つの地区、モンテレイとテキサスのある特定の地域で調査を行った。“敬意”という言葉は、愛、権力、友情、義務という言葉同様、人間社会をまとめる中心的な動機の一つとして調査の中で用いられた。(Díaz Guerrero, 1994; p.163)

彼らは、異なる7つのグループをつくり、2つの異なる社会の間にある重要な違いを見いだしながら、2つの社会における価値の相互普及の調査をしようとした。

北米の場合、敬意は主観主義が余り浸透していない同等な人間関係で成立しているが、メキシコの場合は、高い度合いの個人的感情を持ち込む、とても親しい反応であり、権威主義的モデルの範ちゅうにある

傾向がみてとれる。メキシコ人の大部分は、敬意とは従うというポジティブな義務を差し挟む言葉であると考え、北米の学生は、好むと好まざるをに関わらず、尊敬する人に従わなくてはならない事を意味すると考えている。

3. 調査方法と事例分析

(1) 調査対象者

調査は、11歳から14歳までの20人の学生を調査対象とした。彼らは全員、学校教育の一部を日本で受けてきている。彼らの帰国の時期は1年前から6年前まで様々である。20人のうち、17人が男性で、3人が女性である。

また現在は、ペルーにおいて日系人児童生徒の多くを抱えている、ラ・ウニオン校で教育を受けている。

(2) 調査方法

社会と学校への適応/不適応の段階別に対応するTAMAI（適応、不適応の複数要素自己診断テスト）（Hernandez 1983）の2つのサブテストが適用された。このサブテストは、はい/いいえで答える66の設問から構成されている。

学校不適応の行動と考えられるのは次のとおり。

- (1) 学習に対する能力不足
- (2) 学習に対する低いモチベーション
- (3) 教員への不満
- (4) クラスでの破壊的行為
- (5) 指導の拒否

社会的不適応の行動と考えられるのは次のとおり。

- (1) 人との対立
- (2) 規範、社会的ルールとのコンフリクト
- (3) 広がりのない社会との関わり、内向性、関係性の不足、不信
- (3) 手続き

この報告における手段は、指導教師の職務活動として、生徒たちに個人的方法で適用された。

(4) 結果

20人の学生のテストを分析した結果、彼らの内8人は、学習意欲の低さ（乏しい活動レベル）をしばしば示し（表1参照）、また悪い成績を取った学生は、勉強もせず、働かず、無駄な時間を過ごしていると感じていて、何らかの形で学校不適応をみせている。

3人の学生は、勉強に対する低い目的意識が見られ、勉強することに飽き、学校に行きたくなく、先生のあり方に不満を持っている。

社会的適応については、余りはっきりとした結果が出ていないが、20人のうち2人だけは、社会ルールに強く矛盾を感じ、無秩序への傾倒、反抗的態度などの不適応を示している。

一人の学生は、常に級友の前で口喧嘩や議論をし、攻撃的な傾向をみせている。

(5) 議論

ここに示された結果は、次に述べるような新しい研究課題へのインセンティブおよび理解を目標として、民族教育学分野において何らかの貢献を試みている。

それはすなわち、ペルーに帰国した子どもや若者の社会への再適応には、なにが一番影響を及ぼすのか。

表1 (学校での適応/不適応)

名 前	低 効 率 性	低 効 率 性	教員への 反 感	不 規 律	学 校 不 適 応	指 導 へ の 反 感	学 校 へ の 不 満
Juan							
John					×		
María (女)					×		
Javier		×			×		
Rodolfo	×				×	×	
Jesús							
Ronaldo					×	×	
Sara (女)							
José							
Ernesto		×			×	×	
Tomas							
Kike							
Pedro							
Juana (女)							
Justino							
George	×	×			×		
Hugo							
Coco	×						
Andrés	×						
Aldo	×				×		×
計	5	3			8	3	1
	25%	15%			40%	15%	5%

(注) 表内の名前はすべて仮名。

適応できない問題を抱えた子どもや若者に対する最良の方法とは何か。勉強するにあたって直面する学習能力の欠如や否定的感情、不安をもたらす学校の様々な学習背景の本質は一体何か。不適応は時間で解決される問題なのか。学校には何ができるか。こうした若者達がよりスムーズに適応をできるためには、さらには学業面でも社会的にも個人的にも、よりよい成果をあげるための動機を持たせるには、どのような条件が必要なのか、といったことである。

調査結果にもとづくと、学校不適応は、日本において予め受けた教育年数や、ペルーに着いてから経過した時間とは無関係である。

一般的に、調査対象者らはスペイン語と日本語の2つの文法構造の影響を受けてペルーに帰国するが、言語は適応のための致命的な要素となる。帰国して新たに学生生活を始めると、口頭や文書の資料、概念、情報などを編成して活用しなければならなくなる。その作業のためには、スペイン語の読み書きの能力を使いこなす必要があり、このことは帰国生徒が直面する初期的コンフリクトの1つである。

学生たちはかなりの割合で語学の授業をきらっている(表2参照)。20人のうち75%(20人中15名)が語学の授業がきらいで、55%(20人中11人)が自然科学や社会科学の授業がきらいである。また数学の授

表1 続き (社会的適応/不適応)

名 前	社会的 攻撃性	社会的 価値を 共有しない	敵意ある 内向性	非活動的 内向性	自己アン バランス	社会的 制約感	社会的 不適応	先行 イメージ
Juan								×
John		×						
María (女)								
Javier								
Rodolfo								
Jesús								
Ronaldo		×					×	
Sara (女)								×
José								
Ernesto		×					×	
Tomas								
Kike	×							
Pedro			×					
Juana (女)								×
Justino								
George								×
Hugo								×
Coco								×
Andrés								×
Aldo								×
計	1	3	1				2	8
	5%	15%	5%				10%	40%

業がきらいな生徒も30% (20人中6人) いる。

社会適応については、一見するとかなり容易に適応できているようである (表3参照)。95% (20人中19人) が多くの友人がいると考え、75% (20人中15人) がクラスメートと上手くいっていると言い、そして75% (20人中15人) が友達をつくることは難しくないと考えている。

またこれらの若者たちの大半が、教員との関係をとともポジティブに認識していることを強調しなくてはならない。回答者のうち85%が教員は親切でいい人と感じていて、70%が教員を変えてほしくないと答え、65%が教員のあり方に賛同している。

この回答から、教員は、彼らの学校における適応に大きな役割を果たしていると考えられる。

終わりに、この研究が国立の学校ではなく、独自の特徴を持った民間の学校で行われたことについて触れておく。この学校は日系人生徒を抱えていることを特徴としており、日本語教育をはじめ、朝の“ラジオ体操”、日本国歌の斉唱、運動会、和太鼓の練習、日本民謡など日本の文化を教育や学習の場に取り入れている。

今後の私たちの課題は、日本から帰って来たペルーの若者が、このように日本文化に配慮した特別な学校でなく、普通の学校に入学した場合にどのように適応しているかについて知ることである。

(翻訳者 小野由子・山脇千賀子)

表 2

名 前	数学の授業は好きだ		社会科の授業は好きだ		語学の授業は好きだ	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
Juan	×			×		×
John	×			×		×
María (女)	×			×		×
Javier		×		×		×
Rodolfo	×			×		×
Jesús		×	×			×
Ronaldo		×		×		×
Sara (女)	×		×			×
José		×	×			×
Ernesto		×		×		×
Tomas	×		×		×	
Kike	×		×		×	
Pedro	×			×	×	
Juana (女)	×		×		×	
Justino	×		×		×	
George	×			×		×
Hugo	×		×			×
Coco	×			×		×
Andrés		×		×		×
Aldo	×		×			×
計	14	6	9	11	5	15
	70%	30%	45%	55%	25%	75%

表 3

名 前	友達が少ない		友達を作るのは大変だ		クラスメートは私を不快にする	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
Juan		×		×		×
John		×		×		×
María (女)		×	×		×	
Javier		×	×			×
Rodolfo		×		×		×
Jesús		×		×	×	
Ronaldo		×		×		×
Sara (女)		×		×	×	

José		×		×		×
Ernesto		×		×		×
Tomas		×		×		×
Kike		×		×		×
Pedro		×		×	×	
Juana (女)		×	×			×
Justino		×		×		×
George		×		×		×
Hugo		×	×			×
Coco	×		×			×
Andrés		×		×	×	
Aldo		×		×		×
計	1	19	5	15	5	15
	5%	95%	25%	75%	25%	75%

表4

名 前	教員は親切でいい人である		他の教員に受け持ってもらいたい		教員は別の在り方をしてほしい	
	はい	いいえ	はい	いいえ	はい	いいえ
Juan	×		×			×
John	×			×		×
María (女)	×			×		×
Javier		×		×	×	
Rodolfo	×			×		×
Jesús		×	×		×	
Ronaldo	×			×		×
Sara (女)	×		×			×
José	×			×		×
Ernesto	×		×		×	
Tomas	×			×		×
Kike	×			×		×
Pedro		×	×		×	
Juana (女)	×			×		×
Justino	×			×		×
George	×			×		×
Hugo	×			×	×	
Coco	×			×	×	
Andrés	×			×		×
Aldo	×		×		×	
計	17	3	6	14	7	13
	85%	15%	30%	70%	35%	65%

表 5

名 前	ペルー帰国時期	日本での就学年数	帰国後のペルーでの 就学年数
Juan	1997. 2	6	2
John	1996. 12	5	3
María (女)	1996. 12	4	3
Javier	1996. 9	5	3
Rodolfo	1997. 2	5	2
Jesús	1997. 3	5	2
Ronaldo	1997. 10	6	2
Sara (女)	1996. 10	5	3
José	1994. 7	5	2
Ernesto	1994. 12	5	5
Tomas	1998. 3	5	1
Kike	1997. 2	6	2
Pedro	1995. 4	1	4
Juana (女)	1993. 6	2	6
Justino	1993. 2	2	1
George	1995. 7	5	4
Hugo	1992. 2	3	7
Coco	1998. 4	6	1
Andrés	1995. 4	3	4
Aldo	1996. 1	4	3

ADAPTACIÓN ESCOLAR Y SOCIAL DE LOS JÓVENES PERUANOS MIGRANTES QUE REALIZARON ESTUDIOS EN EL JAPÓN Y QUE RETORNAN AL PERÚ

LAURA YAGUI AKAMINE

UNIVERSIDAD NACIONAL MAYOR DE SAN MARCOS,
CEGECOOP "LA UNION"

El artículo presenta los resultados de la adaptación - inadaptación de un grupo de estudiantes migrantes que cursaron parte de su escolaridad en el Japón y que al cabo de 1 a 6 años de estudios en el Japón han retornado al Perú a continuar sus estudios del nivel secundario. Todos ellos cuentan de 1 a 6 años de haber retornado al Perú.

Se considera las conductas de adaptación/ inadaptación escolar, tales como escasa motivación por el estudio, aversión al profesor, indisciplina, baja disposición para el aprendizaje entre otros.

Las conductas de adaptación/ inadaptación social a considerar son: agresividad, excesiva introversión, conflicto con la norma, desconfianza etc.

Planteamiento del problema

En la presente investigación se trata de hacer un estudio sobre la adaptación escolar y social de los jóvenes peruanos migrantes en el Japón, y que luego de un periodo de haber cursado sus estudios en dicho país retornan al Perú.

Considerando estos jóvenes que iniciaron su escolaridad en el Perú, se abre una gran cantidad de interrogantes, tales como: ¿de qué manera enfrentan el reto de una readaptación a la sociedad peruana?, ¿se produce una nueva reorganización en la estructura gramatical? ¿cuán importante e influyentes fueron las normas de la sociedad japonesa? ¿es la manera de ver el mundo diferente comparando con los jóvenes que nunca migraron?. En esta nueva readaptación a la sociedad peruana, el niño, junto con su familia tendrá que enfrentar situaciones y desafíos, tanto a nivel personal como social.

Pacheco y colaboradores (1984) indican que hay una alteración en la percepción del ambiente físico - socio cultural en los migrantes, alterándose el estilo de vida, las relaciones interpersonales y familiares, así como el sentido de identidad.

En relación a los niños de origen hispano que emigran a los Estados Unidos, Trueba dice que "la adaptación requiere una reorganización completa de habilidades comunicativas y la adquisición de un idioma (el idioma de preferencia) con la exclusión del idioma marcado (la lengua materna de estos niños). Del fracaso de lo anterior se derivan comportamientos que pueden contribuir a altos niveles de tensión y ansiedad" (Trueba, pag.14, 1983).

De acuerdo a la monografía de PEAD (1994), los alumnos peruanos matriculados bajo la modalidad de Educación a Distancia suman un total de 840, las edades de los matriculados varían desde 6 a 23 años. El primer grado del nivel primario es el que cuenta con mayor población matriculada, contando con una población de 103 alumnos; los demás niveles varían entre 62 a 87 alumnos.

La matrícula desde el año 1994, año en que fue creado el Programa de Educación a Distancia no Estatal de los servicios Educativos del COOPSE "La Unión" (PEAD), se han ido incrementando año tras año. En el año 1994, se inició con 274 matrículas, actualmente como se mencionó anteriormente cuenta con una población de 840 alumnos.

Es importante considerar estas cifras, ya que es una población con intenciones de retornar al Perú.

1. Perú y las Migraciones

En los últimos cuarenta años el Perú experimenta un fenómeno nuevo en su historia, se trata de un incremento vertiginoso de la emigración a distintos países. Se crea el "mito del progreso" y la "modernidad" que estaría fuera del Perú. El mayor objetivo son los EEUU, también algunos países latinoamericanos, tales como Venezuela, Argentina y Chile, europeos como España e Italia, y últimamente un país tan diferente culturalmente como es el Japón.

En los años sesenta, la emigración tuvo como meta, mayoritariamente a los EEUU, debido en parte al crecimiento económico acelerado después de la Segunda Guerra Mundial, también fueron "blanco" de emigración Argentina y Venezuela.

En esta década viajar fuera del país era casi un privilegio de las clases altas y los profesionales liberales. La teoría de la modernización y del desarrollo estaba de moda.

El Perú en la década del sesenta el gobierno nacionalista militar en vez de incentivar el retorno de peruanos del exterior, resultó un factor para que la gente continúe emigrando.

A través de las reformas en la agricultura, en la industria y la energía, se alteró la situación de las clases sociales. La concepción del desarrollismo y la modernización que caracterizaban en la década anterior fue cediendo por ideología marxista.

Muchos inmigrantes extranjeros que habían formado su capital emigran nuevamente hacia sus países de origen, otros hacia diferentes países de América Latina como Ecuador, Venezuela, México y Estados Unidos. Los que no estaban de acuerdo con la ideología del régimen también emigraron.

En la segunda mitad de la década del setenta se empieza con mayor intensidad la migración de miembros de la clase media, inclusive campesinos y pastores de la Sierra Central.

La década del ochenta, es una etapa muy significativa tanto en lo político como en lo económico, coincide con la restauración de la democracia, el continuo deterioro de la economía, la violencia política y el narcotráfico, situación que desalentó el retorno, y por el contrario alentaba mucho más la emigración. Es la década de la intensificación migratoria hacia el exterior, apareciendo nuevas rutas migratorias, como es el caso del Japón. Se intensificó la emigración no sólo de la clase alta, sino de la media que empezaban a sentir su empobrecimiento.

En los últimos años la población emigrante peruana en 1980 era de 500,000; diez años después esa proporción creció en más de 100% , aproximadamente 1,100,000 "siendo los nuevos blancos de emigración en el orden de importancia: Japón, España, Italia, Canadá, Alemania, Suiza, Bélgica, Holanda, Inglaterra, Suecia y Dinamarca". (Altamirano, 1993, pag. 12). Esto no significa que se pierda el interés por emigrar a los Estados Unidos, Venezuela, Argentina u otros países .

En los últimos diez años, como se mencionó anteriormente surge un nuevo "blanco" migratorio: el Japón. Esto debido a que el Japón surge como uno de los cuatro países más prósperos del mundo, alcanzando un alto nivel tecnológico, que conlleva a una transformación psico social de la población económicamente activa, principalmente entre los jóvenes, que tratan en lo posible de evitar trabajos manuales, prefiriendo dedicarse a los estudios, realizar

post- grado en el extranjero, actividades de oficina etc., todo esto lleva a una escasez de mano de obra, que obligan a una apertura de oferta de trabajo hacia personas foráneas.

Por otro lado, en los países latinoamericanos, principalmente el Perú se vivía una situación socio- política y económica sumamente crítica, los grupos terroristas: Sendero Luminoso y el Movimiento Revolucionario Tupac Amaru estaban en su apogeo, la inflación calaba hondo en las economías de las familias, existía un ambiente de incertidumbre político social y económico.

A partir de 1990 el crecimiento de la población nikkei en Japón viene aumentando considerablemente. "el término nikkei significa (persona) de origen japonés o más explícitamente, es la denominación genérica dada al japonés que ha emigrado a un país extranjero y a sus descendientes" (Tajima, 1995: p. 403)

Este concepto es un tanto diferente para la comunidad nikkei peruana, pues se considera nikkei sólo aquellas personas que han nacido fuera del Japón pero que tienen algún ancestro japonés.

Los migrantes que llegan al Japón logran asimilarse a la sociedad japonesa con un determinado costo psico- social y cultural, pero ¿qué significa asimilarse a la cultura japonesa? Como manifiesta Altamirano, (1995, pag 259) "este proceso se refiere a la autoimagen que forjan los migrantes de sí mismos respecto a sus actitudes, visión del mundo y la capacidad de lograr o no una nueva identidad". Esta nueva identidad puede tomar aportes de ambas culturas de igual o desigual proporciones o puede conducir a una "japoneización" de la cultura peruana.

2. Adaptación

(1) Adaptación/ladaptación

Para cada persona la adaptación representará un tipo de equilibrio particular, en donde cada uno tiene necesidad de satisfacer y acomodarse a las exigencias del medio ambiente en el que vive, a la vez que de lograr la satisfacción de sus necesidades más íntimas e individuales. Este equilibrio presupone que el medio ambiente ofrezca las aportaciones necesarias al crecimiento y desarrollo individual en una primera instancia, y estímulo para más adelante, a la vez que las exigencias que se plantea al niño no sean superiores a sus capacidades de respuesta. "Ser persona es tener un proyecto de vida y todo proyecto requiere para su realización, una adaptación continua al mundo y del mundo en que estamos: al mundo físico, social, profesional, religioso y cultural" (Jimenez, 1979, pag. 20).

Pacheco y colaboradores (1984) señalan que los jóvenes migrantes de mayor edad son los que expresan mayor dificultad de adaptarse a la sociedad cuando ellos retornan a su país de origen ya que éstos han dejado atrás sus grupos y amistades en donde han estado afianzados, a diferencia de los menores que muestran mayor flexibilidad, asimismo dice que los migrantes perciben y evalúan negativamente su país de origen cuando retornan a ella, tanto desde el plano físico (paisaje, clima, casas etc.), lo social (la gente es sentida como agresiva, no son dignas de confianza etc.) así como un inadecuado aprecio por la propia cultura.

Jimenez (1979), manifiesta que los desajustes escolares se pueden manifestar de diversas formas: en problemas de conducta, en donde el alumno miente, comete robos, actos agresivos, indisciplina, rebeldía, desobediencia etc.; en fatiga, localizándose actitudes de cansancio a veces inexplicables; en distracción donde puede deberse entre otras causas a una falta de interés por las tareas escolares; en falta de seguridad personal y emocional, en donde la inseguridad, la inestabilidad emocional, la ansiedad etc. son manifestaciones de inadaptaciones; en rendimiento insatisfactorio, siendo quizás el síntoma más objetivo, se puede presentar como irregularidades en el cumplimiento de los deberes escolares, falta de perseverancia en el esfuerzo, pereza, calificaciones pobres en determinadas tareas etc.

La inadaptación será considerada como una relación inadecuada entre el individuo y el medio, siendo necesario detectar ésta sintomatología y buscar estrategias para evitar que se formen en los jóvenes y niños características y actitudes desfavorables a su desarrollo personal, escolar y social.

(2) Investigaciones relacionadas

En el ámbito mundial hay diversas investigaciones y seminarios que tratan sobre el problema de la migración y su repercusión en la familia, entre ellas está el Seminario Internacional que se celebró en Ginebra del 26 al 30 de abril de 1976, y cuyo objetivo era determinar los problemas que obstaculizan la inserción de los inmigrantes en el país de acogida y su reintegración a su país de origen.

En dicho seminario se trató entre otros puntos sobre los grandes esfuerzos de asimilación que realizan los migrantes debido a grandes conflictos culturales y lingüísticos que se les plantean "... a su vez, tales conflictos degeneran muy a menudo en problemas de salud mental en el caso de sus hijos" (UNESCO, 1978a: p.12). Asimismo los prejuicios de la mayoría dificultan la adaptación social y lingüística, es así que la adaptación de los migrados depende del status que se le asigna a su grupo en la sociedad.

Taukoma, (UNESCO, 1978b: p.8), indican que los niños migrantes aprenden el segundo idioma más rápidamente a los 9 o 10 años de edad, seguido de quienes se iniciaron en la escolaridad en el nuevo país a los 7 años pues "... los niños que han inmigrado hacia los 10 años de edad son los que están en mejores condiciones para aprender una lengua extranjera, ya que su desarrollo lingüístico en la lengua materna ha tenido tiempo para estabilizarse. La edad más crítica para cambiar de medio ambiente lingüístico se sitúa entre los 6 y los 8 años".

Trueba (1983), realizó un estudio exploratorio sobre los problemas de aprendizaje y de adaptación de niños mexicanos y México-norteamericanos entre escuelas primarias de un Condado de California, encontrándose en los niños mexicanos -norteamericanos de primera generación tres tipos de características: ansiedad, evasión, frustración y tristeza, mientras que los niños mexicanos-norteamericanos de segunda generación manifestaban agresividad, ansiedad, evasión y falta de concentración.

Las investigaciones en el Perú concerniente a este tema, son escasas, debido tal vez, al reciente fenómeno iniciado en los años 80, en donde debido a la difícil situación socio-económica que atravesaba el Perú (con creciente inflación, desempleo y terrorismo) muchas familias peruanas (unos de origen japonés otros no) se vieron en la necesidad de emigrar junto con su familia al Japón. Así, "según el Ministerio de Justicia del Japón el número de los nikkeis peruanos en dicho país no llegaba a 1,000 en 1988. En 1990 aumentó a 10,000 y a fines de 1992 pasaba de 30,000. A comienzos de 1994 se calculaba que había en el Japón más de 40,000 peruanos, de un total de 200,000 nikkeis latinoamericanos (principalmente brasileños)" (Fukumoto, 1997: p.355).

Actualmente, están registrados 41,317 peruanos, siendo Kanagawa (con 6,522 peruanos), Aichi (4,218 con peruanos) y Shizuoka (3,800 con peruanos) las prefecturas que presentan mayor concentración. (Ministry of Justice, 1999)

Pacheco y otros (1994), realizaron una investigación con 22 adolescentes para explorar las relaciones interpersonales de los migrantes identificando los vínculos que éstos establecen con el nuevo ambiente e identifica las ataduras con el antiguo ambiente, en contraste con los adolescentes migrantes de Puerto Rico a los Estados Unidos, están fuertemente la inestabilidad emocional, la ansiedad etc. son manifestaciones de inadaptaciones; en rendimiento insatisfactorio, siendo quizás el síntoma más objetivo, se puede presentar como irregularidades en el cumplimiento de los deberes escolares, falta de perseverancia en el esfuerzo, pereza, calificaciones pobres en determinadas tareas etc.

La inadaptación será considerada como una relación inadecuada entre el individuo y el medio, siendo necesario

detectar ésta sintomatología y buscar estrategias para evitar que se formen en los jóvenes y niños estructuras y actitudes desfavorables a su desarrollo personal, escolar y social.

3. Método y análisis

(1) Sujetos

Se trabajó con 20 estudiantes, entre 11 a 14 años de edad, todos ellos habían realizado parte de su escolaridad en el Japón. El tiempo de su retorno al Perú varía entre 1 a 6 años. Del total de sujetos 17 fueron varones y 3 mujeres (Ver cuadro N° 5)

Todos los sujetos cursan sus estudios en el CEGECOOP "La Unión", Colegio que alberga a la gran mayoría de hijos de inmigrantes japoneses en el Perú.

(2) Instrumentos

Se aplicaron 2 sub-test de la prueba psicológica TAMAI (Test Autoevaluativo Multifactorial de adaptación - inadaptación) (Hernández, 1983), correspondiente a los niveles de adaptación/ Inadaptación escolar y social.

Los sub-test consta de 66 proposiciones en las que el joven deberá responder de manera positiva o negativa.

Las conductas consideradas dentro de la inadaptación escolar son:

- (1) Actividad lenta hacia el aprendizaje
- (2) Baja motivación para el aprendizaje
- (3) Descontento con el profesor
- (4) Conducta destructiva en clase
- (5) Rechazo a la instrucción

Las conductas consideradas dentro de la inadaptación social son:

- (1) Enfrentamiento con las personas
- (2) Conflicto con las normas, reglas sociales
- (3) Limitaciones sociales, introversión, relaciones escasas, desconfianza.
- (3) Procedimiento

El instrumento en referencia se aplicó de manera individual a los alumnos como parte de sus actividades de tutoría. Aparte de las instrucciones estandarizadas incluidas en el formato, se aplicó verbal y gráficamente la forma como debían marcar sus respuestas.

(4) Resultados

De los 20 estudiantes analizados, observamos que 8 de ellos presentan algún tipo de inadaptación escolar (Ver cuadro N° 1) , siendo frecuente la hipolaboriosidad en el aprendizaje (escaso nivel de actividad), sintiendo el joven que se saca malas notas, que estudia y trabaja muy poco y que pasa distraído mucho tiempo, 3 sujetos presentan rasgos de hipomotivación para el estudio, se aburre en estudiar, tienen desgano para ir al colegio, así como disconformidad con la manera de ser de los profesores.

En cuanto a la inadaptación social, se observa resultados menos marcados, es así que de los 20 estudiantes sólo 2 estudiantes presentan altos índices de inadaptación social que se refleja en el conflicto con las normas sociales, presentando conductas de indisciplina y tendencia al desorden.

Sólo un estudiante presentó índices significativos de agresividad, manifestando constantes discusiones y peleas verbales frente a sus compañeros.

(5) **Discusión**

Los resultados que aquí presentamos, trata de llevar algún aporte en el ámbito educativo- etnológico, tratando de comprender e incentivar nuevas investigaciones sobre: ¿Qué es lo que afecta específicamente a los niños y jóvenes que retornan al Perú, en su readaptación a la sociedad? ¿Cuál es la mejor manera de tratar a los niños y jóvenes que tienen problemas de adaptación? ¿Cuál es la naturaleza de los diversos contextos de aprendizaje en la escuela que parecen generar ansiedad, sentimientos negativos o incapacidad para enfrentar tareas académicas? ¿Se trató de una adaptación, que se resolverá con el tiempo? ¿Qué puede hacer la escuela? ¿Bajo qué condiciones pueden adaptarse mejor estos jóvenes y motivarse para lograr un mejor rendimiento escolar, social y personal?

Basándonos en los resultados obtenidos, la inadaptación escolar se presenta independientemente de la cantidad de años escolares cursados previamente en el Japón e independientemente del tiempo transcurrido después de su llegada al Perú.

El factor lingüístico juega un rol predominante en la adaptación, ya que estos jóvenes generalmente retornan al Perú influenciados por dos estructuras gramaticales: el castellano y el japonés. Al llegar a la escuela peruana e iniciar nuevamente su socialización tendrán que organizar y utilizar datos, conceptos e información tanto oral como escrita, será necesario manejar las habilidades de lecto- escritura del castellano, utilizando los recursos lingüísticos del idioma, produciéndose uno de los primeros conflictos al que tienen que afrontar los jóvenes.

Un porcentaje amplio de alumnos, nos manifiesta su desagrado por el curso de lenguaje (Ver cuadro N° 2), de los 20 jóvenes encuestados el 75% (15 de los 20) nos manifiesta su desagrado por el curso de lenguaje, 55% (11 de los 20) nos manifiesta su desagrado por los cursos de ciencias naturales y sociales y el 30% (6 de los 20) por el curso de matemática.

En cuanto a la adaptación social, aparentemente se produce con mayor facilidad (Ver cuadro N° 3), un 95% (19 de los 20) manifiestan que se consideran que tienen muchos amigos, un 75% (15 de 20) nos dice que se llevan bien con sus compañeros, y un 75% (15 de 20) que no les cuesta entablar amistades.

Hay que destacar también, la percepción que tienen estos jóvenes en relación a sus profesores, que en general es bastante positiva, del total de encuestados, el 85% percibe al profesor como bueno y amable.

Consideramos que el profesor juega un rol importante en la adaptación dentro de la escuela.

Para concluir, mencionaremos que este estudio se llevó a cabo en un colegio no estatal con características propias, que es la de albergar a los estudiante nikkeis. Dentro del contexto de enseñanza - aprendizaje, se conserva patrones culturales japoneses como son: la enseñanza del idioma japonés, la práctica matutina del "radio taiso", entonación del himno del Japón, enseñanza del taiko y folklore japonés y se participa en el "undokay" deportivo con las connotaciones culturales japonesas.

Nuestra pregunta es: ¿Y cómo es la adaptación de los jóvenes peruanos que vienen del Japón y que se matriculan en colegios regulares, es decir colegios que no presentan las características especiales antes mencionadas?.

REFERENCIAS

Altamirano, T. (1993), Perú pais de emigrantes, **Cómo estamos** N° 2, Vol. 1 Lima, Instituto Cuanto.
 Altamirano, T. (1966), **Migración - El fenómeno del siglo**, Lima, PUC.
 Díaz Guerrero, Rogelio, Pacheco Angel (1994), "Dos patrones culturales medulares y la difusión de valores a través de su frontera", En **Etnopsicología Scientia Nova**, República Dominicana, Corripio.

- Fukumoto, Mary (1997), **Hacia un nuevo sol. Japoneses y sus descendientes en el Perú**, Lima: APJ.
- Jimenez, Carmen (1979), **El problema de la adaptación escolar**, Madrid, Anaya S.A.
- Ministry of Justice (1999), "Annual report of statistics on legal migrants". Ed. **Judicial system and research department**, minister's secretariat, Ministry of Justice.
- Pacheco A; Lucca- Irizarry N; wapner S. (1984). "El estudio de la migración: retos para la psicología social y la psicología ambiental", **Revista Latinoamericana de Psicología**, Vol. 16 - N° 2.
- Pacheco A; Lucca N. (1994), "La evaluación de relaciones interpersonales entre los jóvenes migrantes puertorriqueños". En **Etnopsicología. Scientia Nova**, República Dominicana, Corripio.
- PEAD (Programa de Educación a Distancia) (1994), **Ideario**. Monografía. Lima: Convenio de Cooperación Kyodai
- Ruiz César (1993), Test autoevaluativo Multifactorial de Adaptación - Inadaptación (TAMAI), Lima, Universidad Nacional Mayor de San Marcos. *s/e*.
- Tajima Hisatoshi (1995), "El caso de los nikkeis dekasegus brasileños, peruanos, argentinos, bolivianos y paraguayos en Japón", **Revista de Estudios Migratorios Latinoamericanos**, Año 10, Agosto 1995, N° 30, Buenos Aires.
- Trueba, H. (1983), "Problemas de adaptación de los niños México- norteamericanos a la escuela-un estudio antropológico", **Revista Latinoamericana de Estudios Educativos** Vol. XIII N° 4.
- UNESCO (1978a), **La Educación de los trabajadores migrantes y de su familia**, Lengua materna e identidad cultural: breve análisis de este problema, París, Unesco.
- UNESCO (1978b), **La Educación de los trabajadores migrantes y de su familia**, La enseñanza de la lengua materna a los hijos de trabajadores inmigrados y el aprendizaje de la lengua de acogida en el contexto socio cultural de la familia inmigrada, París, Unesco.

CUESTIONARIO

PARA LOS QUE ESTÁN EN PERÚ

Nombre.....
 Edad.....
 Fecha de Nacimiento.....
 Lugar de Nacimiento.....
 Grado de escolaridad.....
 Mes y año de venida al Perú.....
 Estudié en Perú desde.....grado
 Estudié en Japón desdegrado hasta..... grado
 Actualmente vivo con.....

Edad:

11.6	12.6	13.6	14.6 a más
------	------	------	------------

Ingreso a la escuela:

menos de 10 años	10 años	más de 10 años
------------------	---------	----------------

Tiempo de escolaridad:

1 año	2 años	3 años	4 años o más
-------	--------	--------	--------------

Or. Et:

ambos	solo 1
-------	--------

Fecha:

ly.

PARA LOS QUE ESTÁN EN JAPÓN

Nombre.....
 Edad.....
 Fecha de Nacimiento.....
 Lugar de Nacimiento.....
 Grado de escolaridad.....
 Mes y año de venida al Japón.....
 Estudié en Japón desde.....grado
 Estudié en Perú desdegrado hasta..... grado
 Actualmente vivo con.....

RECUERDA : QUE NO HAY RESPUESTAS BUENAS NI MALAS, NO HAY NOTA, SÓLO RESPONDE CON SINCERIDAD

1. Me fastidia estudiar	si	no
2. Saco malas notas	si	no
3. Paso mucho tiempo distraído	si	no
4. Estudio y trabajo poco	si	no
5. Creo que soy bastante vago o flojo	si	no
6. Me canso rápidamente cuando estudio	si	no
7. Me porto muy mal en clase	si	no
8. Suelo estar hablando y molestando	si	no
9. Soy revoltoso y desobediente	si	no
10. Me da igual saber que no saber	si	no
11. Me aburre estudiar	si	no
12. Me gustaría que todo el año fuera vacaciones	si	no
13. Me resulta aburrido todo lo que estudio	si	no
14. Me gustaría tener otros profesores	si	no
15. Estoy a disgusto con el profesor o profesores que tengo	si	no
16. Me gustaría que los profesores fueran de otra manera	si	no
17. Me fastidia ir al colegio	si	no
18. Deseo que se acaben las clases para salir pronto del colegio	si	no
19. Me aburro en la clase	si	no
20. Prefiero cambiar de colegio	si	no
21. Tengo muy pocos amigos	si	no
22. Prefiero jugar solo	si	no
23. Suelo estar callado cuando estoy frente a otras personas	si	no
24. Me cuesta hacerme amigo.	si	no
25. Prefiero estar con pocas personas	si	no
26. Mis compañeros constantemente me fastidian.	si	no
27. Los demás son malos y envidiosos	si	no
28. Me gustaría ser muy poderoso para mandar	si	no
29. Siempre estoy discutiendo	si	no
30. Me molesto muchas veces y peleo.	si	no
31. Tengo mal carácter (mal genio)	si	no
32. Me suelen decir que soy inquieto.	si	no
33. Me suelen decir que soy revoltoso..	si	no

34. Me suelen decir que soy sucio y descuidado	si	no
35. Me suelen decir que soy desordenado	si	no
36. Rompo y ensucio enseguida las cosas	si	no
37. Me aburro y me canso enseguida de lo que estoy haciendo.	si	no
38. Me molesto, discuto y peleo con facilidad.	si	no
39. Estudio y trabajo bastante	si	no
40. Saco buenas notas.	si	no
41. Normalmente estoy atento y saco buenas notas	si	no
42. Acostumbro a estar en silencio en clase.	si	no
43. Mis profesores están contentos con mi comportamiento.	si	no
44. Me agrada hacer los trabajos de matemática.	si	no
45. Me gusta estudiar las ciencias naturales y sociales.	si	no
46. Me gustan los ejercicios del curso de lenguaje.	si	no
47. Mis profesores son buenos y amables.	si	no
48. Mis profesores enseñan bien.	si	no
49. En clase estoy más contento que en una fiesta	si	no
50. Me gusta estar con mucha gente	si	no
51. Soy muy chistoso y hablador.	si	no
52. Me aburro cuando estoy solo.	si	no
53. Prefiero salir con los amigos que ver la TV.	si	no
54. Enseguida me hago amigo con los demás.	si	no
55. Me comporto igual cuando estoy solo que con otras personas	si	no
56. Casi todos los compañeros que conozco son buenos.	si	no
57. Normalmente prefiero callar que ponerme a discutir.	si	no
58. Me quedo muy tranquilo si se burlian de mí o me critican	si	no
59. Cuando otros ganan en el juego acepto mi derrota.	si	no
60. Prefiero ser uno más del grupo que ser el que manda.	si	no
61. Soy muy cuidadoso con las cosas	si	no
62. Me dicen que soy muy obediente	si	no
63. Casi siempre hago las cosas sin protestar	si	no
64. Trato con mucho cariño a los animales	si	no
65. Me suelen decir que me porto bien y soy bueno.	si	no
66. Siempre, siempre, digo la verdad.	si	no

El curso que más me gusta es.....
El curso que NO me gusta es.....

REVISAR QUE TODAS HAYAN SIDO CONTESTADAS